

ピックアップインタビュー

パブリカ通信では、注目度UPのハンガリー在住の日本人の皆さんをご紹介します。



N01. ピアニスト 阿久澤 政行さん

2012年1月 イタリアンレストランにて

阿久澤さんは、2010年9月より首都ブダペストにあります音楽の名門校リスト・フェレンツ音楽院のピアノ科に留学中です。昨年より学内だけではなく、様々な場所からコンサート依頼がありアクティブに活動されているピアニストの一人です。今年6月いっぱい2年間の留学を終える彼にインタビューしました。

編集長) なぜ留学をしたいと思ったのですか。

阿久澤) 大学院中に、海外で勉強したいと思う気持ちが強くなりました。もともとリストが好きだということから、リスト音楽院のあるハンガリーを留学先に選び、札幌のリスト音楽院のセミナーに参加し留学資格を頂く事になりました。周りには留学されて戻られて来た方々がいらっしゃいますが、僕は留学がしたくてすると言う気持ちだけではなく、留学しなきゃいけないと強い決断がありました。ただ留学すると言う安易なものにならないように、自分は演奏家としてやっていきたいと思っているので、それには留学というものが必要だったんです。

編) 阿久澤さんの卒業された大学で教えているハンガリー人クラリネット奏者のベルケッシュ・カールマン氏との出会いも、ここに来るきっかけだったとおっしゃっていましたが、いずれにせよヨーロッパへ留学されたいと思っていたのですか。

阿) そうですね。ヨーロッパは観なくてはいけないと思っていました。

編) ピアニストは特にアメリカという可能性もあると思うのですが。。。

阿) 実は、そうなんです。迷いました。ニューヨークにも行ったんです。ジュリアード音楽院の中に入ってどんな感じなのか見てきたんです。あそこで特に思ったのは、自分がクリアな目標・目的がないと、すぐに流されちゃうんですよ。道を歩いてるだけで、そう感じました。

編) 確か留学前に一度ハンガリーに来た事があるって。その時には、どういう印象でしたか。

阿) そうなんです。それこそベルケッシュ氏とコンサートをすると言う事でブダペストに来ました。ブダペストは、いい意味で自分のペースを作る事ができるところが気に入りました。

ただ実際留学してみて感じたのは、自分の時間に甘えてしまうと、すぐにルーズな時間が増える事(笑)。

でも、どんなものからでも、音楽に生かせるヒントがあると感じる事ができています。ピアノを弾いている時だけが音楽の勉強ではないって思います。

日本でもそうだったんですが、こっちにいると街中を散策しているだけでも、すごく発見があるし、自分自身も“あれ勉強したい、これも勉強したい”ってたくさん出てくるんです。

編) 現在2年目の留学生活を送っているそうですが、例えば実生活のどんなところに感じる事ができますか。

阿) 留学中に日本でピアノ協奏曲のソリストという大きな本番もあったりして日本を歩き来しなくてはいけなかったのが、1年目はとにかくあっというまでした。ですが、1年目は、こっちで師事している先生の特徴を捉える

事や自分の今までやってきた持ち曲を中心に、先生にレッスンをつけてもらいました。2年目はどんどん新曲に挑戦していて毎週違う曲を持っていっています。帰国日を決めている為、帰国後の活動の事を考えると、毎週持ってかないと間に合わないんです。

編) 帰国にあわせて、レパートリーを増やしている最中なんですね。帰国後、これやった事ないと言う事が少しでも無いようにですか。

阿) そうですね、でもそれ以上に日本で教わった以上に思うのは、リスト音楽院で師事している各先生は、自分がこうしたいと考えを尊重してくれる事なんです。先生が教えてくれた事をマスターする事だけではなく、それをベースに自分がどうしたいかっていう幅を広げられるように、とても的確な良いアドバイスを与えてくれます。それがとても説得力があるんですよね。

編) 日本で師事していた先生方と、現在ここで師事している先生の大きな違いはなんですか。

阿) 音楽に対してのキャリアが違うのと、音楽の価値観が深いとこですね。

編) 具体的にいうと？

阿) 一音一音がすでに違うんです。とても深いです一音それぞれに意味があるというか。

日本だと、それを理屈で教えようとしたりする系統にあります。日本の先生方は豊富な知識がありますので説明はよく理解できるのですが、実際に弾いて表現すると説得力に欠けるというか。でも様々な音の意味があるって言うのは日本の先生から教わっていたので、知識はありました。ここで師事している先生は、言っている事が音で更に説得力を持たせて伝えてくれるので、様々な観点から気づかせてくれる事が多いですね。

言葉の壁もあるので実際に音で見せて・聴かせてくれるだけでも、その説明が瞬間的に納得できるんですよ。日本での知識を、現在、実際に自分の音として表現する為にはどうすべきなのかという感じで試して理解している最中です。

編) ここでの留学生活で何を習得して帰りたいと思いますか。

阿) 自然体で良い音がでるようになりたいです。日本にいるときは、あーしてこーしてと設定を考えて創り出して行く感じだったんです。

編) 計算して演奏設定していたってこと？

阿) そうなんです。曲に対する方向性なんかも、計算して整理整頓した上で表現を付けていったりしてたので、その設定が緩んだり薄れると、演奏が崩れてしまいがちだったんです。そうではなくて、同じ方向性に持つていくにも自然な流れで表現できるような演奏がしたんですよね。

編) 観点を変えて、自分の苦手なものを一つでも克服して帰国できるような先生からのアドバイスをありますか。

阿) あるとすればオーバーリアクション。(笑)

演奏に対してやりたい事がたくさんありすぎて表面に溢れ出すぎてしまう。それをもっとシンプルに必要最小限で魅了できるような音楽創りをしていっています。現在モーツァルト作品をやっているの、この自身の課題には最適なんです。

編) 留学終了が近づいてくるわけですが、その先のプランなどあったら教えてください。

阿) 留学終了までに、こっちでできればピアノコンチェルトをやっけて帰りたいと思っています。

帰国後は、すでに今年の11月にリサイタルコンサートが決まっているので、まずはそれに向けて調整していきます。それから、この留学の間にハンガリー人作曲家の曲もレパートリーに入れ始めていますので、日本で紹介していけたらと考えています。それから後進の指導というのも視野にいれています。

編) ちょっとピアノから離れて、、休日やピアノを弾いている時以外は何をしてるんですか。

阿) 家でアニメかプロレスを観ています。

プロレスは、リアルに東京ドームとか両国国技館などに観戦に行きたい位です(笑)

アニメは幅広いジャンルを見てるんです。こっちではインターネットで見えます。

気分転換にとか寝れない時にはちょうどいいんです。笑うのが好きなので、お笑いなんかもみえています。

編) 話は戻ってしまいますが、いつから音楽の道へと決断したんですか。

阿) ピアノを始めたのは4歳からなんですが、小学校の文集の将来の夢というテーマに『指揮者になりたい』と書いたくらいです。地元でのピアノの先生が指揮者もやってらっしゃる方でしたので、ピアノを弾きながら指揮を振っているようなレッスンでした。大學でもピアノ科で僕だけが指揮の授業を取ってたくらい、指揮というジャンルが、割かし近い存在だったんです。なので、ピアノを弾きながらオーケストラを指揮する弾き振りには憧れました。

編) 実際に弾き振りされた事はありますか。

阿) はい、一度させていただいた事があります。その時思った事は指揮者という仕事は、演奏家に任せられる能力を持つ必要があるんだなと思いました。自分では、ここだっと思って、がんばったところがオーケストラ側はそれを欲していたわけじゃなかったりと。オーケストラの方々から様々なアドバイスを頂き助けてもらいました。すごく楽しかったですし、今後も、そのようなお話があるようなので、是非勧めていければと思います。

編) 益々今後が楽しみです。是非、ここで習得したものを今後に活かしてくださいね。
期待しています。

とても自分を持っている方だなっと思いを受けてました。

留学生活終了まで、充実した時間になる事を願っています。